

テヤルの意味分析

—非恩恵を表すとされるテヤルを中心に—

部田 和美

要 旨

授受補助動詞であるテヤルには、従来の恩恵的表現の他にも「秘密をばらしてやる」のような非恩恵的な用法があるとされている。本稿では、テヤルを「受影者への恩恵表現」とする考え方から離れ、意図的な〈働きかけ〉と〈変化〉がその基本義であるとする。その〈働きかけ〉が好意的意図でされれば「恩恵表現」や「自己顕示表現」に、悪意の意図でされれば「非恩恵(マイナス利益)」表現になる。「自己顕示表現」は「動作主=話し手」「好意的な動作のみ可」といった条件下のみで成立するが、基本的には恩恵・非恩恵を隔てられるものではなく、そのため文脈次第で恩恵的表現にも非恩恵的表現にもなり得る。

キーワード

恩恵・非恩恵 働きかけ 変化 意図性 好意 悪意

1 はじめに

授受補助動詞「テヤル・テクレル・テモラウ」に関しては、恩恵的表現のほかにも多様な用法が認められている。堀口(1987)、山本(2002)では「テクレル・テモラウ」における依頼・対人関係などの待遇表現に注目した研究が行われ、山橋(1999)、益岡(1991)などではこれら補助動詞文の主観性の問題を取り上げている。本稿では特に「テヤル」に注目し、非恩恵的な意味用法と呼ばれるものを中心に考察する。非恩恵的なテヤルとは以下のようなものである。

- (1) 今度こそ試験に合格してやる。
- (2) 彼の秘密をみんなにばらしてやった。

テヤルの非恩恵的用法は古くから認められていたが(佐久間(1936)、鈴木(1982)など)、周辺のものとしてではなくテヤルの持つ一用法として取り上げているのは豊田(1974)、山田(2004)などが挙げられるだけでそれほど多くない。山田(2004)ではテヤルに現れる様々な現象を観察し、「受影者」といった観点から体系的な分析を試みている。

本稿は、この豊田(1974)、山田(2004)での分析をもとにその問題点を挙げ、テヤルの意味

を再考察する。結果として、テヤルが恩恵・非恩恵の枠を超えた意味をその本質として持つことを示す。

2 先行研究

先行研究における非恩恵的なテヤルの意味記述には、以下のようなものがある。

- ・佐久間鼎(1936) 「いじわる」の動作
- ・鈴木丹士郎(1972) 利益どころか相手に不利益を与える表現
- ・黄順花(1996) 「アイロニ一的」「強い意志」

これらの研究では、非恩恵的なテヤルに触れてはいるものの、周辺的な用法としての記述にとどまっている。非恩恵的な用法をテヤルの持つ意味特性として捉え分析した豊田(1974)、山田(2004)の研究を以下で概観し、その問題点を挙げる。

2.1 豊田豊子(1974)

豊田(1974)は、補助動詞であるテヤルについて「話し手の行為の全く話し手側からの主観的な表現(pp82)」であると述べ、非恩恵的なテヤルを「方向を表すもの」「意志性を表すもの」に 2 分類し、「意志性を表すもの」は更に「受給関係を表す用法」「意志・強意を表す用法」に分けている。「方向を表すもの」とは次のようなものである。

- (3) 彼は伯父には洩らさぬ不平を(妻に)言ってやった。
- (4) Kはその度に心配するには及ばないと答えて遣ったのだそうです。((3)(4)とも pp89)

そして「意志を表すもの」のうち「受給関係を表す用法」は、対象語に向かって動詞が働きマイナスの利益になっているとし、恩恵型との共通性を指摘している¹。

- (5) ぼくは、ボロージャよりも、もっと高く登ってやるぞ。
- (6) ああ、もういっそ悪徳者として生き延びてやろうか。 ((5)(6)とも pp85)

もうひとつの「意志・強意を表す用法」は自己主張・自己の意志の顕示を表し、自分の感情が高まった時の表現に使われるとする。対象に働きかけはない²。

- (7) 資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。
- (8) 畜生、この仇はきつととってやる。 ((7)(8)とも pp87)

¹ 「お前が嫌がるなら」「お前を嫌がらせるために」が文脈に示されていたり、それと分かるような時(豊田 1977:86)

² 「お前が嫌がるなら」「お前を嫌がらせるために」という条件がない時

豊田はこのように分類することによって、テヤルの意味が恩恵型から非恩恵型へ連続性を持っていることを示唆しており、これまで「非恩恵的」と一括りにされてきた中身を具体化させたことに意義がある。しかし一方で、用法間の曖昧性も生じている。この問題を指摘し、新たな観点から分析を試みたのが山田(2004)である。

2.2 山田敏弘(2004)

山田では、豊田(1974)の分類を評価しながらも、「対象=動作の受け手」といった直接的な観点からしか述べられておらず、動作の「対象」と動作から何らかの影響を受ける「受影者」が混同されている点を指摘している。テヤルを正確に捉えるには、直接的な対象だけではなく、影響を受けるものとして間接的な受影者も考察対象にいれなければならないとし、テヤルの意味を受影者の有無といった観点から捉え直している。山田における分類は以下の通りである。

山田の分類³「恩恵型テヤル」

「非恩恵型テヤル」：受影者存在型非恩恵テヤル

受影者非存在型非恩恵テヤル

テヤルはまず「恩恵型テヤル」と「非恩恵型テヤル」に分けられ、「非恩恵型テヤル」は「受影者存在型非恩恵テヤル(以下「受影者存在型」とする)」と「受影者非存在型非恩恵テヤル(以下「受影者非存在型」とする)」に分けられる。そして、「恩恵型テヤル」から「非恩恵型テヤル」へ、また「非恩恵型テヤル」は「受影者存在型」から「受影者非存在型」へと意味が連続していると述べている。「非恩恵型テヤル」には以下のような例を挙げている。

・受影者存在型

(9) よし、そんなら今日は肋骨が折れるまでひっぱたいてやる。(pp199)

(10) (二人をさがすために)電話をかけまくってやるんだ! (pp208)

・受影者非存在型

(11) 少々かせいでやろうと思い、なにかうまくいくことはないかと、あちらこちら探つて歩いていた。(pp201)

受影者の存在が明確な(9)は、従来の「恩恵型」と最も近い関係にあり、(10)のような受影

³ 豊田(1974)の分類と大きな違いがあるわけではなく、豊田の分析に「受影者」という観点をつけたものと言える。このことについては山田自身も指摘している。

豊田	山田
受給関係を表す用法	受影者の存在想定
意志・強意を表す用法	受影者の存在は意識されていない

者が希薄なものから受影者の存在しない(11)に向かうにつれ次第に恩恵型とは離れていき、意志的な意味が濃くなっていく。最終的に(11)ののような「恩恵型」と最も遠い位置にある「受影者非存在型」は真正モダリティ形式へ文法化しているというのが山田の主張である⁴。山田はこのように、典型的な用法から文法化されたものへの連続性を示すことで、テヤルの多様な現象をまとめている。

2.3 テヤルの意味分析の問題点

豊田(1974)、山田(2004)とも、恩恵的・非恩恵的表現を対象への働きかけや受影者の有無によって、それぞれ別のものでなく関連性のあるものとして捉えている。しかし、なぜ本来「恩恵」を表示するものがマイナス利益や強い意志を表す表現に転化するのか、これらの関連性、連続性はなぜ起こるのかといった疑問には明確な答えは出されていない。山田の主張する受影者の有無による意味の連続性については、「日頃の不満を上司に全部言ってやった。」のような文ではどう説明するか。これは受影者が「上司」である「マイナス利益」の表現ということになるが、直観的には「話し手の強い意志」とも感じられる。また、料理などに使われる「塩を少々入れてやりましょう」のようなテヤルはこの連続性とは別の特異な例とされているが、テヤルの意味を統括的に捉えようとするならこのような現象も考察対象に含めていく必要があるだろう。これらの問題を「恩恵性」といった観点から分析するには限界があるように思われる。現象をより正確にまた統括的に捉えるためには新たな意味記述が必要になると思われる。

3 本動詞ヤルの意味性質について

部田(2009)では、本動詞ヤル・クレル・モラウに現れる様々な現象を観察し、ヤル文の意味を「与え手の働きかけによって、モノ(コト)の所有権変化が起こる」ことであると定義した。これによって、今まで周辺的なものとされてきた現象も含めた総括的な意味解釈が可能となる。

(12) 太郎は花子に本をやった。

→太郎の働きかけによって、本が花子の所有に変化

(13) 太郎は砂浜の貝殻を拾って、花子にやった。

→太郎の働きかけによって、貝殻が花子の所有に変化

(14) 先生は生徒に考える時間をやった。

→先生の働きかけ(権限)によって、時間を利用する権利が生徒の所有に変化

⁴ 山田(2004)ではテイルのモダリティ化について、仁田(1989a)で挙げられているモダリティ形式のプロトタイプから検証している。その三つとは、「過去にならない」「話し手以外の心的態度に言及しない」「態度そのものの非存在を表す否定にならない」で、受影者非存在テヤルはこれらの条件を満たしていることを述べているが、本稿でも挙げているように過去形の例も多く見られる。また他の条件についても再考の余地あり、モダリティ化については慎重に見ていく必要があるが、本稿では割愛する。

ヤル文では、受け手に向かった直接的な方向性を持ち、常に与え手の意図的な行為を示している。受け渡しが成立したかどうかの判断は与え手側でなされており、受け手がその判断に関わることはない。この点が「クレル・モラウ」と異なるところである。これらのことは以下の例でも確認できる。

- (15) a*みつばちがおいしい蜂蜜をみんなにやる。
b みつばちがおいしい蜂蜜をくれる／みつばちにおいしい蜂蜜をもらう
- (16) a*ぼくは落ち込んでいる子供たちに元気をやった。
b 子供たちは落ち込んでいるぼくに元気をくれた。
／ぼくは子供たちに元気をもらった。
- (17) a 近所の子供にお菓子をやった。／近所の子供にお菓子を与えた。
b せっかく近所の子供にお菓子をやったのに、泣かれた。
c??せっかく近所の子供にお菓子を与えたのに、泣かれた。

(15a)では、与え手である「みつばち」が意図的な働きかけをできないことから非文になるものとする。また、(16)の対象である「元気」は誰かによって意図的に与えられるものではなく、自らの内面から生まれるものである⁵。従って、受け手側(「元気」を得た人)の判断によって文が成立する。(16a)のように、与え手側の判断によって成立するヤル文が非文になるのも、このような理由による。クレル・モラウ文は、受け手側の判断が文の成立に関与するため、ヤル文とは対照的な結果となっている。(17)は「与エル」との比較であるが、(17a)ではヤルと与エルが同義的であるのに対し、(17b)(17c)では適格性に差が出る。ヤル文では、実際受け手にとって恩恵的な受け渡しでなくても、与え手が「恩恵だ」と判断することで成り立つ。また、「せっかく～のに」のように話し手の意図的な行為を強調するような表現と共起する一方で、与エル文ではそのような表現と共起しにくく、与え手の意図性の有無での対比が見られる。

以上の観察から、ヤルの意味を次のように定義する。

ヤルの意味素性：〈働きかけ〉〈所有権変化〉〈恩恵〉

〈働きかけ〉は、受け手に対し常に直接的・意図的に作用することは既述の通りである。よって〈働きかけ〉は[+直接性][+意図性]といった下位素性を持つ。

⁵ 部田(2009)では「元気、感動、勇気、喜び、癒し点…」などの対象を持つ授受文を、受け手の内面から生まれ表出するものであることから「内面表現対象の授受動詞文」とした。このタイプでは、与え手は意図的な働きかけをせず、無意志的であり、受け手がその感情を持つに至った要因となる。(間接的な〈働きかけ〉となる)

4 補助動詞テヤルの意味性質について

4.1 ヤルからの意味推測

テヤルの意味には、本動詞ヤルの性質が関係しているのは言うまでもない。本節では、3 節で見たヤルの意味からテヤルの意味を推測し、その妥当性について考察する。

本動詞ヤル(クレル・モラウ)では「与え手の働きかけによるモノ・コトの所有権変化」を表すことを確認した。補助動詞であるテヤルは、本動詞ヤルのように「モノ・コトの受け渡し」を表さないため、与え手がモノを移動させるという働きかけはなく、述語動詞の示す行為を対象(被動作主)に向けて行い(つまり働きかけて)、それによって対象に変化が起きることを示すと推測できる。そこでテヤルの意味を以下のように示す。

テヤル：動作主の働きかけによって被動作主に何らかの変化が起こる。

この場合「被動作主」というのは、単に行為の対象をいうのではなく、動作主の行為によってなんらかの影響を受ける対象となるため、「受影者」とする。上記の定義によって、テヤル文は以下のように意味解釈できる。

(18) 太郎は花子に本を買ってやった。

…太郎の働きかけで、花子に(本が買い与えられるという)物理的変化が起こる。

(19) 太郎は花子の部屋を掃除してやった。

…太郎の働きかけで、(花子の部屋がきれいになるという)花子にとって状況的変化が起きる。

(20) 太郎は花子の秘密をばらしてやった。

…太郎の働きかけで、(花子の秘密がばれるという)花子にとって状況的変化が起きる。(非恩恵的な現象でも説明可能)

テヤル文ではこのように、動作主の働きかけで受影者に物理的、心理的、状況的変化が起きることを表していると言える。以下の例を見られたい。

(21) a??ぼくは花子と結婚していてやった。

b ぼくは泣いている花子のそばにいてやった。

(21a)の「結婚している」は状態を表し、変化を読み取ることができないため文が不自然になる。(21b)も、「そばにいる」という状態を表す表現であるが(21a)のような不自然さはない。これは「(ぼくは)本当ならこの場になくてもいいのだが、花子のためにここにいる」といった意味合いがあり、受影者の花子が一人にならずに誰かといる、という状況的変化

を表しているためであると言える⁶。

しかし、先行研究でも指摘されているように、受影者のいないテヤル文も多く存在し、これに関しては上で見たような解釈が難しい。下の例では話し手の働きかけによって何が変化するのかといった疑問が残る。この問題については 5 節で詳しく観察することにする。

(22) ひまだから、ちょっとその辺を歩いてやった。

4.1.2 テヤルの意図性について

本動詞ヤルが「与え手側の判断によって文が成立する」ということについては既述の通りである。これと同様に、テヤルでも受影者に変化が起きたかどうかは動作主側の判断に依存すると推測できる。その証拠として、受影者が無意志物でも自然な文になる。

(23) 涙が出そうになったが我慢をした。鼻水が出た。目を開けたままなので瞑らせてやった。優しい顔をして死んでいる。

(24) 彼女は全力をこめて葉をバタバタ動かして、ハツカネズミを失神状態から呼びさましてやった。
(23)(24)とも BCCWJ より)

(23)の「目を瞑らせる」は死んだ人に対するの行為であり、(24)の「失神状態から呼びさます」はネズミに対するものである。このように、受影者が「影響を受けた」と認識できなくても、動作主側でそう判断すればテヤル文は成立する。また、テヤルは非意図的な副詞と共起できない。

(25) ??うっかり花子に話してやった。

(26) ??持っていたグラスを思わず落としてやった。

(25)(26)はそれぞれ「うっかり花子に話してしまった。」「思わずグラスを落とした。」と比較すると不自然な文であることが分かる。テヤルは常に動作主の意図的な動作を表していると言える。

4.2 恩恵の曖昧性

ヤルの意味素性の一つとして〈恩恵〉がある。しかし、テヤルでは上記の例(20)でも見たように、文脈によって恩恵的にも非恩恵的にも表現することができる。

(27) 残りの料理を全部食べてやった。(恩恵)

⁶ (21)の差は「意図的な働きかけが行われているか」も起因していると思われる。働きかけの「意図性」については節を改めて述べる。

(28) 彼女を困らせようと思い、残りの料理を全部食べてやった。(非恩恵)

(29) うつぶんを晴らしたくて、残りの料理を全部食べてやった。(意志・強意)

(27)のように、文脈を加えられていない状態では恩恵の意味が強いが、(28)では受影者に対する悪意を込めた表現に、また(29)では受影者が存在せず、動作主の強い意志を表す。このように、テヤルの恩恵性は文脈次第でいくらかでも変化することが分かる。

テヤルに見られる恩恵・非恩恵について、山田(2004)では受益者の有無によって連続的に変化していると述べていた。しかし以下の例では受影者の有無だけでは判断できない。

(30) (花子を悲しませたくないから) 花子にはうそをついてやった。

(31) (花子が大嫌いだから) 花子にはうそをついてやった。

上記(30)(31)は全く同じ文だが、恩恵的・非恩恵的両方の解釈が可能である。「窓を開けてやった」のような例では文脈なしではそれが恩恵行為として受け取ることができるが、「うそをつく」はもともと非恩恵的な意味の動詞であり、文脈がない場合(31)の意味で受け取りやすい。このように、恩恵的かどうかはそもそも動詞の意味によっても左右される。「テレビを直してやった。」では恩恵として捉えられるが、「テレビを壊してやった。」だと非恩恵的に受け取れることから理解できる。テヤルの恩恵的性質についてはこのように曖昧さが残るが、確実に言えるのは、動作主が受影者に対する好意なり悪意なりといった、何かしらの意図を持って行為を行っているということである。

4.3 テヤルの定義

以上の観察から、テヤルは動作主の「意図的な働きかけ」がその意味生成に強く関与していることが推測される。よってテヤルの意味について以下のような仮説を立てる。

テヤル： 動作主の意図的な〈働きかけ〉によって受影者に〈変化〉が起きる。

通常、相手に対し意図的に何かをするといった時、好意的に行われるものだけではなく悪意を持った行為もある。テヤルの「意図的な働きかけ」にも好意的に働きかけて恩恵を示す場合と、悪意のある行為でマイナス利益を示す場合の両方存在することが考えられ、これは、前節で観察したような、テヤル文が述語の意味や文脈によって恩恵的にも非恩恵的にもなることから裏付けられる。

〈働きかけ〉の意図性： 好意／悪意

では、受影者が想定されない、いわゆる「意志・強意のテヤル」はなぜ可能になるのか。

一つの推測として、このようなテヤルでは、動作主自身はその受影者として転化される表現になるということが考えられる。この場合、動作主は自分自身に何らかの変化を及ぼすことを意図することになる。以下の例で確認する。

(32) 会社で嫌な事があったので、昨夜は思い切り飲んでやった。

(33) ひまだから、ちょっとその辺を歩いてやった。

(32)はストレス発散のため、(33)はひまつぶしのための行為であり、それによって動作主(話し手)に精神的な変化が起こる。このような自分のために行う(または行った)行為を「わざわざ」言表することで、自己顕示的な表現になると考えられる。このような「自己顕示」のテヤル成立には、話し手自身が動作主となることが必須条件となる。以下の第 3 者が動作主である(34)(35)は違和感のある文であり、無理に意味を読みとって誰かのために好意的な動作をしたことにしかならない。また、話し手にマイナスになるような行為も不自然な文になる。(36a)のような好ましくない動作の場合は不自然に感じるのに対し、(36b)のように自分にプラスになるような理由を文脈に加えると、違和感がなくなり自然な文になることから理解できよう。

(34) ??ぼくの父は、昨夜思い切り飲んでやった。

(35) ??花子さんは、ちょっとその辺を歩いてやった。

(36) a??自分のパソコンにお茶をこぼしてやった。

b 新しいパソコンを買って欲しくて、自分のパソコンにお茶をこぼしてやった。

テヤルの自己顕示的表現は、このように受影者は動作主自身であり「動作主＝話し手」という環境でのみ可能となる。次節では、テヤルに現れるいくつかの特徴的な現象を考察しながら、本稿での推測の妥当性を示したい。

5 現象の観察からの検証

5.1 非意志的事態の意志的事態化⁷

豊田(1974:88)では、非恩恵的なテヤルは無意志的な動詞を意識化させることができると述べているが、山田(2004)では更に、どのような無意志動詞文でもテヤルでの意志化が可能になるのではなく、それには「自己制御性⁸」が関係していることを指摘した。無意志動詞文

⁷ 山田(2004)の第 6 章 2.2.3 で使用されている表現。この現象について詳しく観察されている。

⁸ 仁田(1990)による。動作主の動きの発生、遂行、達成に対する意志的な制御という観点から、「達成の自己制御性」(意志的なもの：行く、食べる、読む等)、「過程の自己制御性」(達成までの過程を制御可能：勝つ、合格する、思い出す)、「非自己制御性」(意志で制御できない：飽きる、困る、分かる等)の 3 つに分けられる。

の意志的事態化が可能なもの、不可能なものに以下のような例を挙げている。

- (37) 包帯なんか、3日であとでやる。
- (38) ヘアチェックに行き、髪の毛がふさふさになってやる。
- (39) 日焼けサロンに通って、色がよくなってやる。 (以上山田 2004;196)
- (40) アラビア文字だって、3か月あれば読めてやるよ。 (山田 2004;198)
- (41) ? 一生懸命描いた絵が入選してやる。
- (42) ? 講演がウケてやる。
- (43) *妻なんか家出してやる。 ((41)~(43)山田 2004;196 判定も山田に従う)

山田(2004)は、(37)~(40)の適格性について、「XはYがV」型構文(ぼく(X)は包帯(Y)がとれる(V))の「X」が、「YがV」という事態に対して制御できる位置にある、もしくはその事態生起の過程に対して努力可能である場合に使用可能になる(pp197~198)と説明している。(41)~(43)が不適格なのは、他者が決定する事態((41)(42))や動作主が意志を持っている事態((43))では「X」のコントロールが及びにくいからであるとしている。

しかし、以下の「財産が増える/事業が成功する」等の動詞文では、話し手(X)がその過程で努力可能であるにも関わらず、テヤル文は不適格になる。

- (44) ??株式売買をして、財産が増えてやった。
- (45) ?新しい事業が成功してやる。

これらの例から「非意図的事態の意図的事態化」のテヤル文の成立には、単に話し手(X)のコントロール可能・不可能だけでは説明できないことが分かる。「非意図的事態の意図的事態化」が可能なものと不可能なものをまとめると以下のようなになる。

・テヤル文可能

三日で包帯がとれる。髪の毛がふさふさになる。3か月でアラビア文字が読める。日焼けサロンで色がよくなる。

・テヤル文不可能

絵が入選する。講演がウケる。事業が成功する。財産が増える。妻が家出する。

このまとめを見ると、意図的事態化が可能になるのは、話し手が自らに対する働きかけによって、自分の望む変化が身に起こり得ることを示すものであることが分かる。「包帯がとれてやる」「アラビア語が読めてやる」では、リハビリや勉強など、話し手が自分に向けて直接的に何かを行い、その結果として自分の希望していた変化が起きることが予想される。「絵が入選してやる」「講演がウケてやる」などは自分に対する直接的な働きかけが

できず、また「自分の身に変化」という点でも曖昧である⁹。以下の例を見られたい。

- (46) * (ぼくは今伸び盛りだから)身長が伸びてやる。
- (47) この薬を飲んで、あと 10 cm 身長が伸びてやる。
- (48) ??ぼくは恋人がいてやる。
- (49) クリスマスまでに恋人ができてやる。

(46)(47)は同じ動詞であっても、働きかけの有無によって適格性に差が出ていると言える。(48)(49)では、「自分に恋人がいる」といった変化を表さない文は不適格になり「恋人ができる」のように自分の身の変化を表す文では適格になる。もう一つ重要なのは、変化して得られる事態は必ず話し手自らの望むものでなければならないという事である。

- (50) * 壁にぶつかって、腕が折れてやる。
- (51) ??高校生になったら、もっと友だちが減ってやる。
- (52) 親友にも役をくれないのなら、主役の私が病気になってやる。(山田 2004;198)

上の(50)(51)のように、話し手自身の利益が予測しにくい文では不適格になることが分かる。(52)の「病気になる」も不利益な事態を表すが、文脈から話し手がそうなることを望んでいることが分かるため自然な文になる。

このように、無意志動詞で意志的事態を表すテヤル文の成立には、話し手自身に向けられた意図的な働きかけが条件となり、結果として自身の望む変化が起きなければならない。これは 4 節で見た自己顕示のテヤルの意味とも一致する。

5.2 事態改善表示用法

ここではテヤルに現れる別の現象について観察する。この用法について、山田(2004)では「テヤルが「受益者に対する恩恵表示」を意味せず、事態改善の用法へとずれこんでいる。(pp81)」¹⁰と述べている。次の例を見られたい。

- (53) 10 円玉ほどを手に取り、髪全体に伸ばしてやりましょう¹¹。
- (54) キャップの部分を押さえてやると、うまくはずせます。

⁹ テヤルとは対照的にテクレルはここで不適格とされている全ての現象が可能になる。

- ・ 大学での講義がウケてくれた。
- ・ 展覧会で私の絵が入選してくれた。
- ・ うまいこと事業が成功してくれた。

テクレルの意味については今後の課題とする。

¹⁰ 他に村田(1994)では、乱暴な感じを避け、言葉の丁寧さをひたすら追求する表現と捉えている。

¹¹ 山田(2004)では、事態改善表示用法は基本的に条件節などの従属節内で用いられるとしているが(pp82)、(53)の例は一般によく使われる表現であり、必ずしも従属節内に現れるとは限らない。

例(53)だと確かに「髪」を受益者とした恩恵表現とはならないが、「(ヘアクリームを)髪に伸ばす」という動作主の働きかけによって、「髪がきれいになる」のような動作主にとって望ましい事態に変化することを意味する。(54)でも同様に、「キャップの部分を押さえる」といった働きかけによって「うまくはずせる」という好ましい事態に変化するという解釈が成り立つ。この用法では、特に話し手の行為に限定されているわけではなく、その行為をする者は全て同じ変化を得られることを表現している点で特徴的であるが、これまでに観察してきたテヤルの本義(意図的働きかけと変化)と矛盾するものではないことが分かる。

5.1 で見た「非意志的事態の意志的事態化」や本節の「事態改善表示用法」は、従来の研究ではテヤルの意味からはずれる特殊な用法として扱われているが、これらも特別な現象ではなく、テヤルの持つ意味で一括して説明を加えることができることを証明した。

6 まとめ

本稿は、豊田(1974)や山田(2004)の分析を否定するものではないが、テヤルの中心的意味を「受影者への恩恵表現」とする考え方から離れ、「受影者に向けられた意図的な働きかけ」とそれによる「状況・心境等の変化」がテヤルの基本義であるとした。これを以下のように示す。

テヤルの意味素性：〈働きかけ〉〈変化〉

〈働きかけ〉は[+意図性]という下位素性を持ち、テヤルでは常に「意図的な働きかけ」を表すことになる。その働きかけが好意的なものであればプラスの変化になり「恩恵表現」に、悪意のあるものであればマイナスの変化になり「非恩恵(マイナス利益)」表現になる。両者を隔てるような制限はなく、そのため文脈次第で恩恵にも非恩恵にもなり得る。今後は、それぞれのテヤル文、特にマイナス利益や自己顕示のテヤル文が起こる環境について、更に詳細な考察が必要となる。また「テクレル・テモラウ」の意味についてもテヤルと対照させながら見ていかなければならない。

参考資料

BCCWJ 現代日本語書き言葉コーパス

参照文献

奥津敬一郎 (1986) 「やりもらい動詞」『国文学 解釈と観賞』51-1; 97-102

古川俊雄 (1995) 「授受動詞「くれる」「やる」の史的変遷」『広島大学教育学部紀要 第二部』44; 193-200

- 佐久間鼎 (1936) 『現代日本語の表現と語法』 厚生閣(1983 ころしお出版より再版)
鈴木丹士郎 (1972) 「動詞の問題点」 『品詞別日本文法講座 3 動詞』 明治書院
豊田豊子 (1974) 「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」 『日本語学校論集』 1; 77-95
東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語の文のモダリティの体系と構造」 『日本語のモダリティ』 ころしお出版
- 仁田義雄 (1990) 「働きかけの表現をめぐって」 『国語論究 2 文字・音韻の研究』
- 仁田義男 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 黄順花 (1996) 「日本語のシテヤル・シテクレル—日本語と韓国語—」 『国文学解釈と鑑賞』 7; 86-93
- 堀口純子 (1987) 「「～テクレル」「～テモラウ」の互換性とムード的意味」 『日本語学』 16-4; 59-72
- 益岡隆志 (2001) 「日本語における授受動詞と恩恵性」 『日本語学』 4; 27-32 明治書院
- 村田美恵子 (1994) 「「やる・してやる」と「あげる・してあげる」」 『国文学 解釈と鑑賞—特集現代語のゆれ』 59-7 至文堂
- 山橋幸子 (1999) 「「てくれる」の意味機能—「てあげる」との対比において—」 『日本語教育』 103;21-30
- 山本裕子 (2002) 「「～テクレル」の機能について—対人調整的な機能に注目して—」 『言葉と文化』 4;127-144 名古屋大学国際言語文化研究科
- 山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』 明治書院
(部田和美 筑波大学大学院生)

Semantic Analysis of “*te-yaru*”: Focusing on non-benefit expression

Kazumi TORITA

The Auxiliary benefactive verb “*te-yaru*”, though typically used to express benefit, also possesses a non-benefit usage as can be seen in the following example - “*Himitsu o barashiteyaru* (Lit. I will his/her secret away.)”. This paper rejects the previous view that treats “*te-yaru*” as “benefit for object” and proposes instead that the central meaning of “*te-yaru*” is intentional “approach” and “change”.

When an “approach” is favorable, “*te-yaru*” expresses “benefaction” or “self-display”, and when an “approach” is not favorable, “*te-yaru*” becomes an expression of “non-benefit”. “Expressions of self-display” are formed when the “agent =speaker” and “only favorable actions of benefit” are used. However, there is no clear distinction between “benefactive” and “non-benefactive” expressions. For this reason, “*te-yaru*” can be treated as either, depending on the context.